

ラテンアメリカ スポーツの世界

今年はリオデジャネイロで8～9月にオリンピック・パラリンピックが開催されますが、それら競技種目だけではない、ラテンアメリカでいま行われている多様なスポーツ最新事情にもご注目下さい。

ニカラグア・カリブの野球事情

サウル・アラナ・カステジョン

ニカラグアで最も人気のあるスポーツは野球である。日本でも相撲に次いで重要なスポーツは野球である。またキューバをはじめパナマ、ドミニカ共和国、ベネズエラ等カリブ海に面する国々においても最も盛んな国民的スポーツは野球である。これらの国における野球の歴史をひも解くと、地理的には遠く離れていても、文化的な嗜好という点では極めて近いものがあるということが分かる。

野球が正式に成立してから数年後にはすでに米国人によってわれわれの国々に伝えられ、その後、1888年に商人アルバート・アドレスバーがニカラグアのカリブ海側にあるブルーフィールド市のクリケット選手たちに野球を紹介し、そのルールを教えた。アドレスバーはニカラグアの南部に「南部野球クラブ」、そして北部に「ホワイト・ローズ」というニカラグアで初めてのチームを結成した。

似たようなことが中米・カリブ地域でも起こった。パナマでは1850年頃米国企業の役員や技術者が担当した運河鉄道の建設とともに野球が始まった。キューバでは1871年頃、ベネズエラでは1890年頃、いずれもニューヨークから帰ってきた大学生が始めた。ドミニカ共和国では1886年頃、キューバの第一次独立戦争(1868～78年)から逃れてきたキューバ人亡命者によって始められた。

ニカラグアにおける野球の変遷：エリートのスポーツから大衆のスポーツへ

ニカラグアの太平洋岸における野球はもともと時間とカネに余裕のある若者のスポーツであった。したがってスポーツの技術を磨くというより社交的な要素が強く、試合も一過性の娯楽であったため、その結果についてほとんど記録は残っていない。

1891年、アドレスバーがカリブ海側で野球を始めから間もなく、米国から帰国したニカラグアの学生たちが首都マナグアで練習を目的とした「レクリエーション会」というチームを結成した。報道記録によれば本格的な野球チームは1901年に結成された「マナグア・ニューヨーク野球クラブ」で、その後1905年に「ボーエル」というチームができた。この名称はニカラグア駐在の米国領事ドナルドソンが英国軍と戦うアフリカの種族に敬意を表してつけたもので、首都の職人や労働者によって構成されていた。

ここでも野球の普及は太平洋岸の重要な町々とコリント港を結ぶ鉄道の建設とともに進んだ。このように国内のエリートによって“輸入”されたスポーツである野球は徐々に変貌した。20世紀に大衆化した結果、ドミニカ人ロベルト・クレメンテのような庶民出身の真のヒーローが誕生する。そして1991年7月モンテリオール見本市でのロサンゼルス・ロジャーズとの試合でラテンアメリカ人として初めて“完全試合”を達成したニカラグア人投手デニス・マルティネスのようなラテンアメリカ人が誇りとする成功物語も誕生する。

1924年、コスタリカで行われた中米オリンピックに



ダニエル・オルテガ大統領臨席のもとに行われた少年野球スタジアム落成式



初めて世界大会に参加したニカラグア代表チーム（1939年ハバナにて）

参加するためニカラグアでもナショナルチームが結成される。1930年には全国スポーツ委員会が初めて正式に全国レベルのリーグを組織、政府も関与することとなり、野球のルールも決められた。1932年には最初のリーグ戦が行われ、「ボーエル」を始めとする太平洋岸のチームおよび初めて首都に遠征したカリブ海側の「ネイビー」などが参加した。

70年代にはニカラグア人プロモーターであるカルロス・ガルシアの粘り強い努力もあってプロ軍団が育成され、後に彼らは大リーグに所属した。ガルシアはニカラグア・アマチュア野球連盟(FENIBA)の会長として、50年代および60年代の「カリブ・リーグ」に倣い、アマチュア野球一部リーグを組織し、その中にはのちにニカラグア・ナショナル・チームの選手としてキューバ、メキシコ、プエルトリコ、パナマおよびベネズエラ等の錚々たる選手と肩を並べるスターたちが誕生した。その時、5人のニカラグア選手が大リーグ入りを果たした。太平洋チームのデニス・マルティネス、トニー・セベス及びボルフィリオ・アルタミラノ並びにカリブ海側のアルバート・ウイリアムスおよびデビッド・グリーンである。

そしてまさに同じ70年代、1976年に山本栄一郎氏を団長とする日本の代表チームがニカラグアとの親善試合のためにやって来た。もっとも、それ以前にも1972年11月末に「ニカラグア親善72」と命名され、マナグアで実施された第20回アマチュア野球世界選手権に日本代表もカルロス・ガルシアの招きに応じて参加している。同大会にはカナダ、キューバ、台湾、米国、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ドミニカ共和国、イタリア、日本、ニカラグア、パナマおよびプエルトリコが参加した。

72年の世界選手権に参加するためニカラグアを訪問した日本チームは、小田義人、橋爪昭二、船見信幸、古川義弘、古屋英雄、蓑輪努、中村裕二、新美敏、大場勝、鈴木博昭、高田新次、辻哲也、植松清春、山

田智千、山本好宏、細川昌俊、池田善吾、池谷公二郎、石川勝正および榊原良行によって構成されていた(注)。ピッチャーの池谷公二郎は野球ファンにセンセーションを巻き起こした。ニカラグア人のスポーツ記者がいみじくも述べたように、コージローは東洋から敗北をもたらした。彼の投球は目にも止まらず、ニカラグアのナインはきりきり舞いさせられ、まさに電光石火のごとく容赦なく叩きつけられた。この時、ニカラグアは日本チームに手も足も出せずに終わった。

1972年12月、ニカラグアの首都マナグアが大地震に襲われた。国立スタジアムは辛うじて地震に耐えたが、国も野球も大きな打撃を被った。地震の後、サンディニスタ国民解放戦線(FSLN)によるソモサ独裁政権打倒の動きが急速に高まり、79年7月19日遂にソモサ政権は倒れた。

80年代には内戦による被害等もあったが、野球は国民的スポーツとして発展し続けた。その頃、ニカラグア史上初の全国野球選手権大会が開催された。この大会は野球を愛し、かつプレーしていた反ソモサの闘志である著名なサンディニスタに敬意を表してヘルマン・ポマレス・オールドニェス大会と呼ばれた。この大会は全国の野球ファンの注目を集め、ほとんどすべての県から18チームが参加し、選手もほぼ全員ニカラグア人であった。

90年代および2000年代初めには野球は勢いを失ったが、時の政府も特に関与しようとはしなかった。ニカラグア国民の熱意といくつかの企業のFENIBAへの支援によりなんとか命脈を保った。05年にはグラナダ、サン・フェルナンド(マサヤ)、ボーエル(マナグア)、レオンおよびティグレス(チナンデガ)のチームが参加するプロ野球結成が目の目を見ようとしたが、この試みも指導者間の内紛や資金不足のため長続きはしなかった。

... para el viaje a Japón para invitar
ar en la XX Serie Mundial de Béisbol



Miembro del equipo de béisbol de Japón en Nicaragua



Jugadores del equipo de béisbol de Japón durante
la Serie Amistosa con la Preselección de Nicaragua, 1972

ニカラグア駐在米海兵隊野球チーム
新聞報道より (1914 年 12 月 16 日)

09 年以降今日までダニエル・オルテガ政権および民間部門の FENIBA 支援により野球は再び息を吹き返している。国内が一致協力してこのスポーツの再編成が行われ、青少年レベル並びにプロのレベルでの振興および新しいスタジアムの建設に資金が充てられている。

今日のニカラグアでは野球は再び新たな酸素を吸入した。あらゆるレベルの大勢の人々がプレーしている。4 チームから成るプロのリーグ、7 チームから成るスーパーリーグ、少年リーグ、各県のリーグのほか、全国に各地区のリーグが存在する。

国際レベルにおいてもニカラグアは現在再び野球の国として認められている。野球は単に庶民の娯楽であるのみならず、ニカラグア人に精神の高揚と、誇りをもたらすとともに、ニカラグア人の文化と気質の一部を形成する特別なスポーツなのである。われわれはこのスポーツの実践において長い道程を辿ってきた。われわれは、ニカラグアが遠からずワールド・ベースボール・クラシックやカリブ・リーグのような国際試合において活躍するために必要な質的飛躍を遂げるであろうことを信じて疑わない。

ニカラグアと日本の今後の展望

ニカラグアと日本は友好の絆を強める手段として野

球というものを持っている。両国は 2 世紀以上にわたってこのスポーツを楽しんできた。日本は規律正しい練習によって質の高い野球を開拓した。それは世界の称賛の的であり、国際試合において実証されている。ラテンアメリカでも質の高い野球をプレーしているが、日本との違いはわれわれの最上の選手はメジャーリーグ (MLB) にいるということである。デニス・マルティネスが 1976 年にボルチモア・オリオールズに入団した後、さらに 13 人のニカラグア人選手が米国の最高レベルのプロ野球球団に所属している。最近ではチェスラー・カスバートが 2015 年中頃にカンザスシティ・ロイヤルズに入団した。

日本の野球は技術的に急速に進化した。日本選手の優秀さはどこからくるかと言えば、それは規律正しさ、選手が互いを尊重し合うプロ意識、チーム・プレー、そして日本人としての誇りである。日本では我々の国々で往々にして見られる個人プレーは奨励されない。

先進国である日本はわれわれの国々に比べ野球に対してより多くの資金を投入することができる。ラテンアメリカでは最高の選手はより良い収入を求めて国外に出るため、国内のチームの安定性は損なわれることとなる。その例外として大リーグへの移籍を規制している国もあるが。

スポーツは団結という要素をもつ。野球は我々を近づけ、国家間の協力と関係緊密化のチャンスを提供する。野球を愛好するという血を受け継ぐ国民にとっては、その夢は実現可能である。その高い理想の達成はわれわれの精神のうちに宿っている。侮れる相手はどこにもいないが、バットとボールさえあれば、闘志を燃やし不可能と思われることも可能にすることができる。

野球が日本とラテンアメリカの関係をさらに緊密にしてくれることを願っている。日本のチームと中・南米のチームの親善試合を奨励したい。野球への情熱は、われわれの間の地理的距離を縮め、ラテンアメリカと日本の統合、交流および補完関係の強化に資すること疑いなしである。

(S.E. Sr. Saul Arana Castellón 駐日ニカラグア共和国大使)
(協会副会長 伊藤 昌輝 訳)

(注) Juarez, B. (2006). Japón y Nicaragua. Contribución a la historia de sus relaciones diplomáticas.